たたらリハビリテーション病院通信
みんなそろって タラッタ たたら
vol. 55
2024年8月号

## たたらリハビリテーション病院
# 創立20周年レセプション を開催

2024年5月11日に、たたらリハビリテーション病院20周年レセプションを開催致しました。記念講演では大阪府にある西淀病院の結城由恵副院長をお招きして、地域に根ざしたHPH活動についてご講演頂きました。懇親会では、友の会の方々を始め、八田公民館館長や地域のクリニックの方、当院元職員など、多くの方にご挨拶を頂き、盛大なレセプションを開催する事ができました。

講演をする
結城由恵医師

間合いが絶妙な
司会でした

挨拶をする
岩元太郎院長

（左から）初代総師長・院長・事務長

ふくおか健康友の会たたら香椎支部の皆さん

元総看護師長を囲んで

## 地域と連携した健康づくり
# 筥松フレンド会

筥松フレンド会は「筥松校区老人いこいの家」でのふれあいサロンとして、2015年から月に2回のペースでおしゃべりや体操など、健康づくりに取り組まれています。

当院からも運動の講師として年数回参加させて頂いています。15人程で活動を続けられており、毎回笑いが絶えない元気いっぱいのサロンです。

# 3Dプリンター自助具
## に多くの反響 ～熊本・菊陽病院から見学に来院～

疾患別リハビリ教育入院の開始に合わせて始動した3Dプリンターによる自助具作成は3年目を迎えました。今年、「いつでも元気，2024年5月号」に掲載されたことで、法人内はもとより全国から多くの反響を頂きました。千鳥橋病院リハ技術部では3Dプリンターの導入が検討されており、医療活動の広がりが期待できます。7月には熊本の菊陽病院から医療従事者5名の方が見学に来られました。

機器を新機種に一新したことで、操作性や作品のクオリティ、作品データの簡便さが向上しました。自助具はもとより、上肢スプリント、インソール、訓練道具等へと作品作りの幅が広がってきています。

菊陽病院の方にも体験して頂き、好評でした

自助具だけでなく「くまモン」も作れます

福岡医療団 FUKUOKA IRYO DAN
発行元／公益社団法人福岡医療団　たたらリハビリテーション病院広報委員会
〒813-0031 福岡市東区八田1-4-66　TEL:092-691-5508　FAX:092-691-5634
http://www.tatara-reha.jp　たたらリハビリ
たたらリハビリテーション病院は、日本医療機能評価機構認定病院です。

# 新入職員のご紹介

今年度、新卒７名が入職しました。
看護師４名、リハビリ技師２名、社会福祉士１名です。
よろしくお願いします。

医療社会科
社会福祉士
**梅野 志歩**
福岡県出身

患者さん、ご家族に寄り添った支援が出来るよう精一杯頑張ります。

リハ技術部 PT 科
理学療法士
**久本　航**
大分県出身

患者さんに寄り添ったリハビリや退院後の生活を考えていきたいです。

リハ技術部 PT 科
理学療法士
**久保田 航史**
宮崎県出身

患者さん1人ひとりに寄り添うリハビリテーションを心掛けて日々頑張っています。

6F 病棟
看護師
**中村 莉子**
福岡県出身

看護業務を覚え、安全に効率よく行うことを頑張っています。今後も業務を安全に行い、自立できるよう頑張っていきます。

5F 病棟
看護師
**山野 和奏**
福岡県出身

毎日笑顔で患者さんと接することを頑張っていきます。

4F 病棟
看護師
**鍋田 有希**
福岡県出身

時間内に業務ができるように頑張っていきます。

3F 病棟
看護師
**平野 愛佳**
長崎県出身

任された業務を一つ一つ丁寧に行うようにしています。初めての事は時間がかかりますが、これからも丁寧に行っていきたいです。

# 能登半島地震の支援に参加して

6階病棟・看護師　麻生 美咲

6月17日から21日までの5日間、災害支援として石川県の城北病院と輪島診療所に行かせていただきました。4日間は城北病院の病棟で援助をさせていただき、主に患者さんの全身状態の観察や、身の回りの世話を行わせていただきました。スタッフの話から、災害後は輪島市からも多くの被災者が病院に避難してこられ、入院患者さんの中にも被災された方が入院されていたとのことでした。私が支援に行かせていただいたときは被災された方は病棟に1人まで減っていて、病院も地震の被害でひびが入っていましたが、すでに壁紙など修繕されており、とてもきれいな状態まで回復していました。

輪島診療所前にて（左端が麻生さん）

5日間の支援のうち1日は輪島診療所へ行かせていただきました。輪島市はまだまだ建物損害が多く残っています。建物が倒壊していたり、危険の赤紙が貼られた建物がまだ多く残されていました。どの建物も地震により歪んでおり、安全と評価された家でもトイレのドアが閉まらないなどの現象が起きていました。

仮設住宅で生活している方も多く、今回安否確認とあわせて食料品を持って、住宅を1件1件訪問させていただきました。お話を聞くと、もともと広い家に住んでいた方が多く、「仮設住宅などは間口も狭いため肩などをぶつける。」「キッチンが狭くてまな板を置くところがない。」などの話や、自転車に乗っていなかった人が「移動手段がないため自転車に乗るようになったが、地面が地盤沈下ででこぼこしており、転倒してしまう。」と言われ、最近頭部を打撲されていました。

仮設住宅への訪問

実際に私が現在の輪島市の状況を見て、まだまだ地震による爪痕が深く残っているにも関わらず、テレビではあまり見かけなくなり、徐々に風化してきていることを感じました。もともと漁が盛んな町であり、海に出れないことで漁獲量が減っているなどの現状を目の当たりにし、今後も支援が必要な町であることを感じました。私が見てきたことを今後もたくさんの人に伝えていきたいと思いました。

倒壊したビルや陥没した道路が手つかずの状態でした